

## コロナ後、ママ区議会議員の現在地点

南雲由子

(板橋区議会議員)

### ◆コップの水が溢れたとき

二〇一二年十二月。衆議院選挙の開票速報を、広い倉庫をDIYでリノベーションした共同アトリエで、デザイナーの友人と飲みながら見ていた。

当時の私は現代美術アーティストとして、二〇〇九年の越後妻有アートトリエンナーレや、二〇一一年の横浜トリエンナーレ特別連携プログラム「新・港村」など、まちづくりとの結びつきが強いアートプロジェクトに作品を発表していた。三・一一や原発事故があつて、友人は国会前のデモに行

くようになり、自分の周りでは「選挙に行こう！」という盛り上がりを感じていた。

しかし結果を見て何より驚いたのは、投票率がひどく低かったことだ。

原発について、働き方や子育てについて、まちづくりについて、未来について、自分が同世代の友人と話すような「普通の人」の声とは違うことが政治の世界で起こっていると感じた。若者は何も考えていないわけではないけれど、二十代の投票率は二〇%、三十代で三〇%といわれる。投票率が低い

政治が売れていない。その理由は中身が面白くない

からか、売り方が悪いからではないかと考えて、私は他の政治家のチラシのデザインの仕事を始めた。そのうち選挙のスタッフも頼まれるようになり、元々アートプロジェクトで住民と何かを一緒に作ったり、ボランティアと協働でイベントを作ったりしていた経験が活きた。

そして二〇一五年四月の区議会議員選挙。私の場合、最後はコップの水が溢れるような感覚で、ある日、目が覚めたらすごく大きなものに腹が立っていた。二、三日それが消えなくて、突然私は「自分が選挙に出ようと思う」と家族や友人に言った。家族は大反対。地元の幼馴染は笑った。選挙では駅に終電まで立って挨拶をしたり、たすきをかけマイクを持つったり、選挙カーに乗ったりした。政策チラシやSNSでの発信にも力を入れ、四千四百人の思いを受け初当選した。

### ◆スーツにごはん粒が付いている私の役割

初当選後、最初の一年は、どこか言葉の通じない場所へ留学しているような感覚だった。区議会であうテーマは、区内での生活や環境全てに関わり、大変広範にわたる。妊娠期から子育てのサポート、教育、介護保険、後期高齢者医療制度から空き家、公園、駅前再開発、産業振興、自転車の安全、地域ネットワーク、ゴミ問題など、板橋区内での生活に関わる全てだ。その全ての知識をゼロから勉強しなければならず、また役所の人が話す行政用語が聞き取れず、戸惑った。

区議会議員の仕事を一言で説明するならば、区役所を一つの「会社」だとすると、区長はその「社長」で、その会社が税金を使って区民のためになる仕事をしっかりと行っているかを「区民の代表」としてチェックする、いわば「外部取締役」が区議会議員である。

当選後、戸惑いながら区議会の本会議や委員会

議論をする中で、「自分の色」を出して、話し合うべき議案に質問や提案をすることが大切だと感じるようになった。「自分の色」とは、立候補時に選挙で区民の方に約束した公約や、自分が代弁している区民の声だ。議論するテーマが広範だからこそ、どんな内容に議案として向き合うときも「自分の色」で返すと肚を決めて仕事をするようになってから、楽になった。

それは、テレビで見る「笑点」の大喜利のイメージに似ている。紫色なら腹黒い、水色はエロ、黄色はおバカ：などのキャラクター。もし「笑点」を議事録化して、発言者を伏せて読んでも、おそらくそれが誰の答えかわかるであろうキャラクターがそこにある。

政治家になってみてわかったことは、板橋区五十七万人の中には、いろいろな考えや立場の人がいて、それぞれの正義が違うことだ。それが社会であり、それを議論し合い、一歩ずつ合意形成していくことが「政治」というものの本質なのだと感じる。

むことを許可する議会基本条例があったが、産休育休などの期間は定められていなかった。公務員と同等の期間を取ろうと決め、産前六週、産後八週間議会を欠席して、議会に復帰した。

そして私は子育て「当事者」として議会に立つようになった。

電動自転車に子どもを乗せて、保活でやっと入れた、一駅離れた保育園へ送ってから区役所に向かう。議会に行くスーツの、議員バッジの横に、子どもの朝ごはんのごはん粒が付いていることもあった。

政治家の武器は言葉で、当事者の思いがこもった言葉は重い。妊娠中や子育てで区の子育て支援サービスを使い、保育園や小中学校の教育について、子育て「当事者」として議会で質問、提案する。それは区議としての私の、大きな役割になった。一期目よりも難しいといわれる二期目の選挙で、政党も無所属ながら七千三百五十五票と得票を伸ばして二位

私は、黄色の着物を着ているイメージで仕事をした。わからないことがあれば、それを大切にして「わからない者代表」として質問する。自分がいかに区民として生活するかが、全て仕事の「おいしいネタ」になる。区議会議員の仕事面白く感じるようになった。

また、若い人の投票率をあげたい、という思いが、私の政治家としての原点にあり、区議として政治をわかりやすく伝えることには全力で取り組んだ。日頃政治に関心が薄い方に届くよう、デザインや紙質にもこだわって作った「板橋区議会 Press」や SNS などの発信に力を入れ、二〇一七年には、マニフェスト大賞で「優秀コミュニケーション戦略賞」を受賞した。

そして議員になって二年目に妊娠、出産を経験した。板橋区議会の場合、任期中に別の女性議員が妊娠出産した前例があったため、マタニティハラスメントや女性ならではの壁など、あまり大変な思いはしなかった。当時板橋区議会には、出産や介護で休

当選し、二期目をスタートした。

#### ◆コロナ禍とマイインターン

二期目の四年間は、ほとんどコロナ禍だった。

これまで地域の方に直接顔を合わせていた地域行事もなくなり、駅前でチラシを配ることもはばかれるようになって、政治活動も大きく変わった。これまでのような活動が出来ないからこそ、SNSでの発信にこれまで以上に力を入れ、オンラインで仕事をする機会も増えた。超党派の自治体議員向けオンライン政策勉強会の企画運営に携わるようになり、全国の自治体議員と毎週「会って」意見交換するようになって、政策を勉強する機会は大幅に増えた。

我が家の場合、パートナーがジャズバーを経営し店に立っていたことから、長い営業休止と自粛生活もあった。飲食店の方が感じる、いらだちと政治に対する怒りは毎日肌で感じられたし、報道を見なが

ら、また議会で議論をしながら、政治とは何かを考えた。えさせられた。

また、アーティストやミュージシャンの活動も止まってしまった。私は議員になる以前、現代美術アーティストとして活動し、大学院で文化政策を研究していた背景から、政治とアートというテーマで講演や発言を求められることも多くなった。政治と文化芸術の間で、両方の言葉を理解し、間をつなぐ「翻訳者」を増やす必要があると感じ、仲間の自治体議員を集めて、文化芸術振興自治体議員連盟を立ち上げた。

しかしコロナ禍に、議員としての活動で一番変わったことは、区民の方からの相談が爆発的に増えたことだ。

コロナが初めて国内で確認された直後、最初の緊急事態宣言の頃に多かったのは、経済的に不安を感じるシングルマザーや離婚前のひとり親の相談と、小学校の休校に関する意見だった。その後、度重なる緊急事態宣言下で、子育てサークルや児童館など

土曜日か日曜日の朝九時から十時にオンラインで意見交換をする。そのほかはLINEで、何か思うことがあった時に言い合ったり、私が議会で子育てや教育に関する政策を話す際に、モニターの区内での実情や生の声を教えてもらったりした。議会ではそうした声を、データやグラフも用いながら提案した。

二期目は無所属で会派も一人になり、発言する時間など制約はあったが、無所属である分、自由に、是々非々でほかの区議の皆さんとも連携が出来るようになった。この四年間で実現したことのうち、一番印象的なのは、超党派で医療的ケア児の保育園や小学校への受け入れを実現したことだ。日々の生活や子育てで感じるモヤモヤを、身近な板橋区の政治で変えられる可能性を実感した。

#### ◆十年後、二十年後のために

さて、二〇二三年現在。実は私は今、自分でも思

居場所がなくなり、孤立してメンタルの不調を感じるママパパの相談がとにかく多かった。児童相談所にも関わるような案件で、シングルのママの代わりに子どもを保育園に迎えに行ったり、個人的なことまで長電話で話すこともあった。また、子どものマスクや行事の中止など、言葉にならない「子育てのモヤモヤ」もたくさん聞いてきた。そうした声の多くは、相談を受ける専用公式LINEかSNSから届き、少しやりとりをした後、オンラインで面談をすることも多かった。

二期目になって、私はママインターの受け入れを始めた。これまでもNPOを通して大学生インターの受け入れはしていたが、同じ志を持つ女性の自治体議員の呼びかけで、一緒にインター活動をしたいママたちの募集をかけた。私の事務所には、計十一名の区内ママが集まった。政治家になりたいのではなく、日々の子育てで感じるモヤモヤや、日頃ママ友にもしくい教育や政治の話を真正面から話せるママサークル、といった感じで、月に一度、

いもよらなかつたほど大きな挑戦をしている。板橋区のリーダーになるためのチャレンジだ。元々政治家になろうと思っていたわけでもない私が、今自分の身の丈よりずっと大きな挑戦をしていることを少し不思議にも感じるが、様々な機会があって、自分が望む選択肢がないなら、私自身がなる、という決意をした。その挑戦を決めた時、一つ心残りに感じたことは、区議会議員をやめることだ。区議会には子育て当事者の声が必要で、区民の方からの相談や意見も多い。そんな中、区議には新たにママインターとして活動していたうちの一人が挑戦してくれらることになった。子育て当事者の区議としての私の思いと、これまで多く寄せられてきた区民の方からの意見や相談も託せる。バトンを渡して、私の気持ちにはホッと安心した。

挑戦を決めた一番大きなきっかけは、板橋区で世代交代が進まなかったことだ。コロナ禍に、区議として様々な相談を頂く地域の現場で、社会の価値観

が大きく変わっていくことを肌で感じた。また多くの意見や相談から、地域の中での孤立が深まっていることなど、課題も目の前にある。また板橋区は、都心から近く通勤に便利だ、ということを街のアイデンティティとして発展してきた街だ。しかし、働き方や通勤の概念が変わり、この先、どんな街になつていくのか。板橋区に住む意味とは何か。未来像を示すべきでは、と議会でも繰り返し質問してきたが、現状維持の区政に危機感を感じるようになった。今の子どもたちが大人になるときに、職業の六割は変わるといわれている。VUCA（世界情勢や社会が急激に変化し、将来の予測が困難な状態）の時代ともいわれ先行きが見えない時代、だからこそ十年後、二十年後の板橋区の未来像をしっかりと示し、変化に柔軟に対応していくことが必要ではないだろうか。

きっかけのもう一つは、これまでオンラインの政策勉強会などで一緒してきた四十代の自治体議員が、相次いで首長選挙に挑戦し、当選したことだ。

（了）

そしてリーダーが変わると、これほどまでに大きな変化が起きるのかと驚いた。私にとって、その応援に行き政治の変化を目の当たりにした時間は、政治家として磨かれる大切な時間だった。

私は、これまでの区政を百八十度変えようとか、壊して新しいものをつくらうとは思っていない。価値観が多様な時代、強い、一人で何でも決めるリーダーより、むしろファシリテーター的に、さまざまな人の声を聞いて、新しい答えを見つけるリーダーが必要だと感じる。また全部を区役所がやるのではなく、区民やNPO、企業などと対話しながら一緒にまちをつくりたい。

私は今、五歳の子どもの母親で、子どもが大人になる十年後、二十年後のために今、政治家の仕事をしている。十年後、二十年後を考えることが、現役世代の私が負っている責任で、今私が政治をやる意味だ。

## 【特別論文】

### 私たちのことは私たちが決めるー当事者として関わる政治とは

#### 高橋富代

（尾崎財団「罌堂塾」運営委員・元下田市議会副議長）

#### はじめに

イギリスの政治家であり法学者でもあったジェームズ・ブライスが、「地方自治は民主主義の学校」という有名な言葉を残しました。

しかし、地方政治は民主主義を実践する一番身近な現場でありながら、選挙の投票率の低下や候補者が定数に満たないなど、主権者である住民から遠い存在になっています。これらは政治家側の努力が第一ですが、政治家に一票を投じている主権者として私たちの責任も問われる問題です。

本稿は、これらの課題を解決していくための基礎知識として必要な地方制度や政治参加について、また私たち住民が当事者としてどう関わっていくのかを考えていきます。

#### （一）地方政治のシステムを知る

##### ① 地方政治は二元代表制

市区町村や都道府県など地方自治体（地方公共団体）は、二元代表制という制度で運営をしています。議会の議員、首長共に直接選挙で選んでい